

マルサス生誕二百年

吉 田 忠 雄

現代におけるマルサス

『人口論』の著者トマス・ロバート・マルサスが生まれたのは一七六六年二月十三日であった。したがって、ことしはマルサス生誕二百年にある。

だが、それにもかかわらず、マルサスの生国イギリスにおいても、またその他の諸国でも、マルサス生誕二百年を記念する行事が開かれるということは、ほとんど耳にしない。わずかに、人口論の専門誌“Population Studies”が本年中に、マルサスの特集を行うということを聞いているくらいである。マルサスは、忘れ

られた思想家であり、マルサスの人口論も現代に生きていない旧い思想として冷遇されているのが現実であろう。

事実、世界は、マルサスの人口論を欲してはいない。先進諸国では人口増加率の減退、とくに労働力の不足に悩んでいるので、人口の抑制を説いたマルサスに耳をかす余地はほとんど持っていないのである。後進諸国でも、人口が激増していて一見マルサス理論を求めているような印象を与えはするが、しかし道徳的抑制を説いたマルサス理論は、後進諸国の人口爆発には焼石に水で、マルサスのような生ぬるい処方箋をこえて、もっと単刀直入な新マルサス主義の理論を熱心に求めたのである。共産社会でも、マルサスはイギリスにおける「フランス革命」を弾圧した御

用学者とみなされ、意識的にマルサスは抹殺されていた。このように、世界のどの地域においても、マルサス理論が息するところはないような感じを与えている。

一九三〇年代、ケインズはマルサスを高く評価し、「もしもマルサスのみが、リカードに代って、十九世紀の経済学の系統として続けられていたとするならば、世界はこんなにちはるかに賢く、そしてはるかに富んだ場所であつたろうに！」と最大の讃辞を呈してはいるが、そのケインズの人口論自体、マルサスの人口思想に結節点を見出すことができるかどうかには疑問はあるし、むしろケインズは、マルサスの経済思想や人口理論を誤訳して讃嘆したと思えるふしもないわけではない。

マルサス人口論の真意

マルサスの人口論は、二十世紀後半のこんにち、はたして有効に生きているのかどうか。マルサス生誕二百年、『人口論』初版が公刊されておよそ百七十年後の現代において、思想家としてのマルサスは、はたして生きているのかどうか。

そのことを検証するためには、まず、マルサス自身の「真意」

を明らかにすることが重要であろう。マルサス人口論の真意が、一般に流布されているように、人口は幾何級数的に増加し、生活資料は算術級数的に増加するというような性質のものでないことは、すでに多くの人々によって論証されている。事実マルサス自身も、「付録」の中で、「私が初版を公刊したのは、人口は幾何級数で、食物は算術級数で増加することを立証するためであるという人がいるが、このことは事実に反する」といつていることから明らかである。J・S・ミルも、マルサス人口論にとってそのような級数の比較は、枝葉末節なことだと断定している。現代の多くの教科書が、マルサスの人口論の根幹をこれら両級数であるとして、その説明と批判にあてているが、それは怠慢のそしりはまぬがれないと言ってよい。

では、マルサスの真意はどこにあったのか。これについては、マルサス自身が簡潔に叙述しているのである。たとえば「付録」の中でマルサスは、本書全体を読破する時間のない人は、次のわずかな数頁を眼を通すならば理解できるとして、自分自身の手で人口論の真意をまとめているからである。

強大で有効な人口を望む点において、私は人口増加をもっとも熱心に主張するものと異なるものではない。古代の著者

は国家の富強を測定するものは領土の広狭ではなく、人口の大小であると主張したが、これについて私は完全に同意するものである。私が彼らと異なるのは、ただ強力で有効な人口を得る方法のみである。

このことから明らかなように、逆説的ではあるが、マルサスの真意の一つは、適切な人口増加にある。なぜなら、「まことに私は、常にあらゆる人為的ならびに不自然な人口制限方法は、ともに非道徳的で、かつ勤勉にたいして必要な刺激を奪う傾向があるので、特に非難してやまない。もしも各々の既婚夫婦が、希望どおりの子供数に制限することができたとするならば、明らかに人類の怠惰は非常にいちじるしく増大し、個々の国の人口も、全地上の人口も、永遠に自然で適当な大きさに到達することはなからう、と思われる理由がたしかに存在している」とマルサスは主張しているからである。

つまり、マルサスの意図は、一方において、道徳的抑制により、ある程度の人口抑制を主張するが、反面、あまり減らしすぎることなく、「自然で適切な大きさ」の人口を維持することをすすめることにあったと判断すべきであらう。一つは、人口抑制、他は人口増加であり、適切な人口抑制と、適切な人口増加とを、

マルサスは考えていた。つまり、マルサスの人口論は、両刃の剣であった。しかし、マルサスの時代にあつてはポピュレーション・ストがはびこり、救貧法思想が定着していたため、それを打破する目的から、人口抑制の刃を余計多くふりまわしたことは否定できないが、これは時代のせいだとも言えよう。そして、マルサス人口論の真意は、適切な人口抑制と適切な人口増加にあったとみるのが妥当のようである。

先進国にマルサスは生きているか

このようにみると、現代世界はマルサスを求めているかどうかを、もう一度再検討する必要があるだろう。従来、マルサスが否定されたのは、マルサスの真意を理解して否定していたからではなく、俗流化され、まめつし、原型を止めていないような「マルサス理論」が否定されたにすぎず、そうでないマルサスはこんにちもいぜんとして生きているように思われる。

先進国における人口増加の停滞傾向は、結婚年齢の上昇という「道徳的抑制」も一因となっているが、より多くは、受胎調節の技術の向上と普及、つまり「人為的ならびに不自然な人口制限方

法」によるものであることは明らかである。マルサルは、かつてこうした方法による人口の抑制を非難し、それは怠惰をひきおこし、社会全体を停滞させるだろう、と信じた。先進諸国は、はたしてマルサスが予見したような結果に終わったであろうか。先進諸国といっても、国によって出生水準にかなりの差があり、アメリカ合衆国のように高い出生水準を維持している国もあれば、ハンガリー、スウェーデンのように低い出生水準の国もある。ただ、先進諸国を比較して言いえることは、人口増加が比較的高い国は一般に、活気にみちているという印象は否定できないであろう。

たとえば、スウェーデンの出生率は、一九六〇年現在で一・三七％であるが、ノールウェーは一・七三％となっている。この両国を比較して感ずることは、スウェーデンの方が社会的に見事なまでに整っており、ノールウェーは、いま発展に向って動いているという印象を与え、活気の点でも、ノールウェーの方がスウェーデンよりもあふれているという印象をうける。ノールウェーの社会は、スウェーデンと比較して、未整備であるから活気に満ち、またそうだからこそ、出生率が高いのか、あるいは、出生率が高いから活気にみちているのかは、即断できないようではある。ともかく、人口増加率が小さくなると、マルサスのいうよう

に、怠惰が増大するかどうかは断定できないが、しかし、人口増加率の高い社会では、活気にみちる傾向があることは否定できないようである。とするならば、マルサスの人口思想には、やや誇張されたものがあつたにしても、人口増加が社会発展に不可欠というマルサス理論の妥当性を、これは意味するものと解釈することもできよう。

しかし、現代から見ても、マルサスが誤り犯したと思われる点も見のがしえない。たとえば、マルサス自身、生存権と出産権が両立することが「人口法則」からみて不可能であることを説いたが現実に、生存権と出産権とは両立しうることを、先進諸国のいくつかの国は示しているからである。北欧福祉国家あるいは西欧の福祉国家は、いずれも出産の自由と社会保障とは矛盾なく存在しうることを実証した。この点は、マルサスにとって驚異だったとみてよからう。マルサス自身、出産権と生存権とは二者択一的なものだと思ひ、生存権をすてて、出産の自由を説いたわけである。そうした思想の根底となっていたものは、マルサスの人口論であつた。すなわち、生活資料をこえてたえず増加しようとする人口の傾向が生み出すメカニズムのゆえに、出産の自由を認めながら万全の社会保障を約束することは不可能であると、考えたの

である。

こうした点で、マルサスが誤まりを犯したことは明らかであり、十八世紀末から十九世紀中葉にかけてのマルサスとマルサス批判者との攻防は、マルサス批判者の側に勝利の軍配をあげてよからうが、それにもかかわらず、人口波動のいとなみを洞察し、人口の増減には進転面と運転面があることを理解し、しかもその両面を統一的にとらえたことはマルサスの卓見であり、マルサスは二十世紀後半にあっても生きていくなよりの証左だと言えよう。事実、人口減少国では人口増加にもっとも苦心しているが、なぜ人口増加を欲しているかをたずねてみると、人口増加にはプラス面もあるということを、人口が減ってみてはじめて再評価しうるものが動機となっている場合が多い。実際に、人口が減少している社会では、労働力が不足して、それが経済発展のボトル・ネックになっているばかりではなく、社会全体に発展の刺激が少なくなり、また青少年に活気がなくなつて、時には、青少年犯罪と結びつかないわけではないと判断されているからのようである。こうした現象こそ、かつてマルサスが憂慮した点であつた。とするならば、先進国でも、マルサスは半ば生きていたと言えるようである。

後進国にマルサスは生きているか

後進国では、マルサス理論は妥当するかどうか。マルサス自身は、人口のいちじるしい抑制ではなく、適当な増加をもたらすほどの抑制を認め、そのための具体的手段として、「道徳的抑制」つまり、結婚の延期のみをすすめたのである。

けれども、後進国では、結婚年齢の引き上げという生ぬるい手段では承服できず、もっと直接的効能をもつ手段をもとめた。日本のように、人中妊娠中絶という形をとったものもあれば、インドのように不妊手術を大量に採用する手段も時には見られるが、ともかく、出産の抑制が至上命令とされてきた。したがって、こうした短兵急な要請は、マルサスの政策理論とはほど遠いものがあったし、そのためこうした理論は、新マルサス主義といわれた。

ポピュレーションリストが、人口を万能と考えたように、新マルサス主義者は、逆に人口抑制こそ、あらゆる問題の鍵をにぎるものと信じた。そのため、経済発展や社会の近代化を遂行するために、まず、人口が抑制されねばならないとして、いかな

る手段をとつても人口を抑制しようとしたのである。

日本は、人工妊娠中絶というもつとも原始的な手段の大量の採用によって近代化をなしとげたが、他のどの国も、人口抑制の直接的手段では、いずれも成功しなかった。むしろ人口革命を遂行して経済発展に寄与させようとした経済投資の企てのいずれも失敗し、経済を進展させなかったばかりではなく、逆に人口のみを増加させるという「人口投資」に終り、開発計画の担当者を嘆かせたのである。

人口抑制のための人口抑制策は成功しないということを学びとった人々は、結局、迂回的な方法であるが、人口を抑制するため、まず社会を近代化させねばならず、そのことが経済発展への唯一の滑走路であることを知ることになった。つまり、経済発展をするためには社会開発が不可欠であり、かつそうした総合開発計画のみが、はじめて人口を静止状態にするものであることがわかった。社会の近代化はまた、大家族主義に代って個人主義的思想を定着させるし、伝統を修正し、女性を解放する。教育もまた普及する。このような状態になると、男女の結婚年齢は、おのずから引き上げられる。これこそ、意識せざる「道徳的抑制」以外のなにものでもなかった。

ということは、新マルサス主義こそ、後進国の開発の救世主と信じられていたが、それは長い眼で見ると、ほとんど効果がなく結局、新マルサス主義に代ってマルサスが登場することになったのである。このことは、後進国でマルサスが生きていることを証明していることになる。

共産社会でマルサスは生きているか

一七九八年に、マルサスが『人口論』初版を公刊したねらいの一つは、平等思想の打破にあった。マルサスは、ゲーテの言うように「平等と自由を同時に約束する立法者や革命家は、夢想家かイカサマ師である」と信じていたかどうかは明らかではないが、ともかく、自由と平等とは二律背反の性格をもっていると考えていたようである。いうまでもなく、マルサスは平等よりも、自由を愛した。

しかし、二十世紀になると、自由と平等とは二律背反的なものではない、という思想が抬頭してきた。イギリスでは、フェビアン社会主義がそのことを正面から主張したし、イギリス以外でも社会民主主義思想は、いずれも自由と平等の補完的の性格を訴えた

のである。

けれども、マルクス主義の影響を強く受けた共産主義は、自由を従来とは違った意味に解し、従来の観念の「自由」よりも平等を先行させることを唱えた。マルサスの見方からすれば、共産社会は自由を犠牲にして平等を主張する社会だと言えよう。したがってそこには、人口法則が猛威をふるい、たちまちのうちに、平等社会は壊滅する運命にあると考えらるべきであった。

しかし、ソ連は、人口増加によって崩壊するどころか、逆に人口減少に悩まされていた。従来の共産主義者が、人口論を敵視しマルサスを罵倒したのも、こうした現実を背景にしていたからである。けれども、ソ連もまた、マルサスの影響を受けていなかったわけではない。というのは、ソ連で人口が不足している原因をたずねてみると、革命とその後の社会不安が、大量の人口を死へと追いやっていたからである。第二次大戦後も、人口不足に苦しんでいるのも、戦争による死者が膨大な数にのぼったからである。つまり、ソ連では罪悪および困窮が人口増加を妨害していたからこそ、人口増加に悩まされなかったのである。それに加えてソ連国民は、革命以後も、食糧、住宅などの不足に苦しめられつづけてきた。それを防ぐため、婦人の多くは、子供を生まずに、

ひそかにヤミ堕胎をしていた。その規模は、もちろん明確ではないが年間百万件は下るまいと推定されている。とするならば、ソ連もマルサスの人口法則の圏外にあったと、はたして言いうるであらうか。

さらにまた、中国をみよう。中国は、革命成功以来、一貫してマルサスを非難し、その人口法則が架空のものであることを強調してきた。たとえば、一九五四年十一月一日、中国人口が六億をこえていることを公式に発表した白建華（國勢調査局長）は六億の人口をおそれるものは「破産にひんしたマルサス的人口論に執着しているブルジョア経済学者」であると断罪していた。

それにもかかわらず、中国の人口政策は三転、四転するのだった。一九五四年、産児調節の法制化が企てられ、翌一九五五年には党中央委員会から「人口抑制政策は、広汎な人民生活にとって重大な問題である。現在の史的条件下では、国家のため、家庭のため、また新しい世代の利益のために、党中央委員会は、人口抑制の適正な実施に賛成する」という公式の指示を出すまでだった。これこそ、マルサスの人口論以外のなものでもなかった。

けれども中国は、一九五七、五八年ころから、再び人口増加政

策に転換しつつあった。ことに、一九五八年の「大躍進」後、はつきりと人口増加を歓迎する雰囲気をつくり出していった。人口の抑制をとんでいた馬寅初北京大学校長は、一九六〇年三月に職を追われた。

ところが、例の「大躍進」が幻のように消えうせると、再び人口抑制策がみられるようになった。一九六二年には、家族計画普及のキャンペーンがみられはじめた。そして、それと同時に、晩婚がすすめられるようになった。晩婚の利点が宣伝され、避妊器具の生産と販売が軌道にのるようになった。晩婚をすすめる点で中国はマルサスを受けいれはじめたと言えるが、人為的な産児制限をも併用しているという点で、それは水まじされたマルサス主義だったのである。

一九六四年、中国をつぶさに見たロベール・ギランは、次のように記している。(ロベール・ギラン、井上勇訳『中国——これからの三十年』文芸春秋新社、一九六五年刊による)

中国の産児制限は、そういうわけで、現在のところ、近代的方法を欠いているが、独自の切り札を持っている。それは政府の宣伝力と、与えられる「勧告」に従順に従う、大衆の気構えである。「家族計画」の宣伝は、例えば、政治教育の席上など、

あらゆる機会を利用して行うことができる。……現在すでに、当局が、すべての中国人の生活、とくに青年層にたいして持っている支配力は、ある程度、出産にブレーキをかけている。……この分類にはいるもののなかで、まず第一に挙げるべきは一九五七年に着手され、一九六二年あるいは一九六三年以来、強力に推進されている、結婚年齢引き上げの大運動である。農村、都市を通じて、鳴りもの入りで展開された、この大宣伝は

男性は三十歳以前に、女性は二十五歳以前に結婚しないように「勧告」している。これは、いうまでもなく、出産数を減らすための努力の一部であるが、そのことは、たれも、ひと言もいわない。

このような状況の中で、中国では「性弾圧」を行っているという。男女は、私生活で分離され、厳しい戒律の下におかれる。公認の年齢以下での恋愛は、ブルジョア主義者として排斥されそうであるし、相互監視の集団行動の下では、「集団的、非自発的道徳的抑制」が行われる可能性がある。これこそ、マルサスを非難しつつ、マルサスを採用した変態だと言えよう。

歪められた形で、共産社会にも、マルサスは生きているようである。

ケンブリッジにマルサスを訪ねて

現代の世界に、マルサスは生きている、と実感している私は、かつてマルサスの姿を求めて、ケンブリッジ大学を訪ねたことがある。

一九六三年秋、北欧諸国の福祉政策の調査研究をおえた後、私はヨーロッパ大陸のいくつかの国をみて、イギリスに渡った。アムステルダム空港から夕方の七時に発った飛行機は、一時間の時差のあるロンドンにさしかかった時、すでに夜もふけていた。空から見るとロンドンは広く、東京を思わせた。私の研究は、マルサスとイギリス社会主義思想を出発点としていただけに、イギリスの土をふむことは希望のねがいであった。ロンドン滞在の数日後、ようやく地理もわかりかけてきたので、十一月二十六日、マルサスを訪ねてケンブリッジ大学への一人旅に向った。

ロンドンの中心街のピカデイルのホテルに宿泊していた私は、まず地下鉄で、キングス・クロスに下車した。ここで、列車の発車場所がわからず、通りかかったイギリス人にたずねたが、ケンブリッジへの始発駅はここではなく、リバプールだとしきり

に言うのだった。変だと思い、別の人にたずねると、この先にあるというので歩いてゆくと、列車の発車ホームをみつけることができた。

出札窓口で「ケンブリッジまで」というと、出札掛員は「シングル?」と聞く。一人旅の私は、もちろんそうだと答える。(ところが、あとになって知ったことだが、ロンドンからケンブリッジまでは、有効期間中、片道でも往復でも同額で、「リターン」と言えば、往復切符を片道の料金で渡してくれるそうである。「シングルか」と聞かれた私は、「一人ですか」という意味にとり、「片道ですか」とは理解できなかったのである。「シングル・チケット?」とでも聞いてくれたら、外貨を損せずすんだのに、と「商人の国」イギリス人の商才を感じした。)

列車は、三輛編成のもので、日本でも大都会の周辺によくみられる私鉄の鈍行だと思えばよい。十時三十分に発車したこの列車には、客もまばらで、三分の二ほどの座席は空いていた。発車してはどなく、周辺は耳なれた地名があらわれてくる。マルサスもこの周辺を馬車で通ったのではなからうかと思ひながら、窓の外景色をみつめる。

ロンドン郊外を少しはずれると、イングランドのこの地は、日

本の高原に行くように、人家はまれとなってくる。二百年前は、おそろくもつと人煙まれであつたと思われるのに、なぜ、マルサスは『人口論』を書いたのかとふしぎに思った。十二時十分頃、列車はケンブリッジについた。駅の近くに、ケンブリッジ大学出版部の看板が眼についたのが妙になつちかった。

ケンブリッジ駅について、記念に切符を手に入れた私は、バスに乗った。めざすところは、マルサスが学んだジーザス・カレッジであつた。ジーザス・カレッジにいちばん近いところに下車した私は、人にたずねながら、右手の方へと歩いて行つた。近くまでいながらなかなかみつからず、ようやくジーザス・カレッジをさがしあてた。

裏門から入つて行つた私は、門の入口にたてかけてある自転車車のむれに、マルサスの時代とかけはなれてゐる現代を感じた。前々からなにも連絡もせず、また紹介者もなかった私は、まず門衛に、マルサスがかつて学んだこのカレッジを見学させていただきたいことと、ここに保存されているかもしれないときいてゐるマルサス文庫を見せてもらいたいことを告げた。

とくに、マルサス文庫については、かねて南亮三郎教授から聞いていた。南教授は一九六一年六月四日（日）、ケンブリッジを

たずね、マルサス文庫がどこにあることを知らされ、見たいねがいを持ちながら、日程の都合がつかずに断念されたと聞いていただけに、マルサス文庫をせひともさがし出したいという執念を私は日本を出発するときから持っていたのである。しかし、ジーザス・カレッジをみることを快よく許してくれた門衛も、マルサス文庫についてはなにも知らないということだった。そこで私はこのカレッジの司書に、聞いてほしいとたのんだ。門衛はしばらくの間、電話で照会してくれたが、マルサス文庫はない、ということだった。

意氣こんでこの地をめざしてきただけに、私の落胆は大きかつたのだらう。それを見かねた門衛は、ここに留学してゐる日本人と会つたらどうかとすすめてくれた。もしや、マルサス文庫がわかるかもしれない、と思つて案内をこい、寄宿舎内の日本人留学生に会いに行つた。（ケンブリッジ大学で、カレッジというのは、寄宿舎であることを、この時はじめて知つた。）

ここで私は、ミスター・タナカに会つた。同君は、都立大学の出身で会計学（？）の勉強に來てゐるということだった。私の名前についても、なにかで読んで知つてゐるということで、親切に私の案内役をかつてくれた。しかし、ジーザス・カレッジは、か

つてはマルサスが学んだところであるということは、私によつてはじめて知ったということで、このカレッジにマルサス文庫があるということとは聞いたこともないというのだった。しかし、あるいは、マーシャル文庫、もしくは経済学部の図書館にあるかもしれないと言ってくれた。そこで、同君をさそつて遅い昼食をとりその後、経済学部を案内してもらふことになった。美しいキングス・カレッジ、ケム河、それにかかつている橋、ケム・ブリッジの起源などを知ることができた。そして、経済学部の図書館を訪れた。

ここで、受付の人に、マルサス文庫のことをたずねたが、知らないということだった。あるいは——氏がいるとわかるかもしれないが、その人は不在だということで、ここでもみじめな思いで退散せざるをえなかった。私は、ミスター・タナカに感謝しつつ、その図書館を背にしなが、改めて出なおしたいと語つて歩いた。図書館を四、五〇〇メートルもはなれたところまで歩いてきたとき、見知らぬ人がかけつけて私によびかけた。「日本からマルサスをたずねて来たのは、あなたか」というのだった。「そうです」と答える私に、マルサスの関係書物はジーザス・カレッジにある、たずねて行けばわかるようにしておいた、と息をはず

ませつつ話してくれた。後で聞くと、名はクライドン (Claydon) 氏ということだった。

思いがけぬ好意に、私は心から感謝した。そして再び、ジーザス・カレッジに引き返したのである。ジーザス・カレッジの図書室に行くと、婦人の司書らしい人が案内してくれた。場所は、正門のわきの階段をのぼった二階と三階の中間くらいにあたる薄暗い部屋であつた。その一角の棚に、マルサス家から寄贈されたという本が収められていた。

本の冊数は、ほぼ四〇〇冊でいどと感じたが、文学書などが多く、マルサスが人口論に引用した文献のかおりとは、ほとんど無縁のような印象を与えた。事実、この文庫は、マルサスの文庫ではなく、息子ヘンリのものといわれているものであつた。本をめくると中には

Ex libris Henrici Malthus
olim partis sui T. R. Malthus
COLLEGIO JESU CANTAB
R. A. Bray Arnigen

d. d.

1949

と記されていた。

そのうちの幾冊を手にとってみたが、所有者がほとんどページをめくったとは思われない感じであった。マルサスの『人口論』初版や二版もあったが、パラパラめくってみても、綿密な書きこみなど全く見当らず、真新らしいものをそのまま保存したという感じであった。

うすら寒い電灯の下で立ちつくして時間をすごした私は、案内してくれた婦人がかたわらにひかえていることに気づき、心からの感謝を言つてこの文庫から立ち去ることとした。

バスの始発点近くの店で、この日の記念にと、ジーザス・カレッジの木製のペンダントとネクタイを購入した。バスで、ケンブリッジ駅に赴き、四時四十分発のリバプール・ストリート行きの列車に乗りこんだ。ロンドンには六時すぎについたが、目的をはたしおえたことで、さわやかな心持となつてホテルに帰りつくことができた。

南人口論とマルサス

わが国のマルサス研究は、明治の初期からはじまっているが、

それらの多くは、いずれもマルサス人口論の略述であつたり、あるいは俗流マルサス論を批判して論破したという単純なものが多かった。

その中で、大正時代の後半から、マルサスの思想と正面から取りくみ、マルサスの真髓をとらえようとした南亮三郎教授のマルサス理論の研究は、ひときわ光彩を放つものに感ぜられる。

南教授の人口論は、人口法則と生存権にたいする考察を出発点としていた。これら二つの関係こそ、十八世紀末の社会思想家の最大の関心事であつたことはいうまでもないが、同時に、マルサス人口論の核心でもあつたわけである。南教授は、マルサスと同じような発想で人口法則と生存権の問題に肉薄していった。これは、マルサス対マルクスの攻防という形でとらえる争点でもあろう。けれども南教授は、一般の予想とはことなり、マルサスの側から立つてマルサス研究に着手されたのではなく、逆に、マルサス批判者の側からマルサスに肉薄していった感を受ける。人口問題の究明なしには、いかなる社会思想の提唱も意味をなさないと信ずる点でマルサスを思い出させるが、南教授は、はじめはマルサスよりも、ゴドウィンに愛着を感じていたようである。しかし出存権と出産権の二者択一的存在は、南教授を次第にマルサスへ

追いやった。そして、マルクスにもかつて多くを学んだ南教授はマルサスとマルクスとの関連を追求し、ついに、マルクスの産業予備軍の法則の根底にもマルサスの人口法則がある、と主張されるようになった。

人口論への愛着と、マルサスへの傾倒は、年を追うていじりしくなり、学位論文『人口原理の研究——人口学建設への一構想——』（昭和十八年公刊）は、マルサスの独自性を論証し、それを基軸として人口学を体系的にまとめあげた。俗流のマルサス人口論解釈を排斥した南教授は、「マルサスの人口理論は、規制原理と増殖原理とを骨格とし、その内面的な連結から生ずる両者の交互作用としての人口の周期的擺動を、すなわち人口の進転運動と逆転運動との連続的反復を意想したところに、頂点を有するものと云わねばならない」と主張された。それは、弁証法的発想をとり入れた、ダイナミックな歴史理論であったといえよう。南教授は、そうした歴史観に心をひかれていたと思われるふしがあるが、マルサスこそ、そうした史観の最初の人物であったと論証したのである。

第二次大戦後、南教授の人口論研究は、しばらくの間とだえたが、昭和二十八年頃より再びはじめられた。昭和二十九年に公刊

された『人口論』（三和書房刊）の序文には、人口論研究の戦列に復帰する喜びを伝える文が綴られている。

マルサス研究に、新しい装いがこらされ、「擺動」というむずかしい文字は、「波動」になおされた。南教授のマルサス研究はこうして、戦後においてもつづけられた。そのマルサス人口論の解釈においては、日本において独自なものだっただけではなく、世界においても類を見ないものであった。南教授のマルサス解釈が、正当なものかどうかは、後世の研究者が結着をつけてくれるであろう。

しかし、マルサスの諸著作から直接多くを学び、さらに、南教授の諸著作を通じて、また直接に、多くを教えられた私にとつて、南教授のマルサス解釈は、基本的に肯定できるものであるしマルサスのかくされた意図を説明したものと見えよう。マルサスは、明確に意識せずに、歴史理論とその人口原理をのべていたのかもしれないが、それを体系化し、マルサスの真の意図を浮きばりにしめた最初の研究が南教授のものだと私は理解している。

そうした意味で、南人口論は、世界的研究水準をぬく業績だったと言えよう。

（一九六六年二月十三日——マルサス生誕二百年の日——）